

此の軍隊的統一は、獨逸の教育方面に於ても、能く表はれたり、即ち、六萬一千五百五十七個の小學校を始めとし、其の卒業生を收容して、之を精神及び肉體の兩方面より、訓練する兵營及び兵營生活を完成せしむべき軍事大學より、二十二個の帝國大學十一個の高等工業學校、六個の高等商業學校、十一個の音樂學校に至るまで、一糸亂れざる訓練の系統を組成せり。

國民的精神統一

獨逸帝國史を案するに、普魯西が獨逸帝國を建設するには、同種なる民族の精神的統一を以て其の第一要件とせり。蓋し、是れより先き、獨逸民族の宗教的生活統一を缺き、獨逸的精神の墮落し去りしこと、猶ほ日本今日の現状と、髣髴たるものありしなり。然るに哲人ライヒナー一たび現はれ、「獨逸國民に告ぐ」て、獅子吼を試むるや、天下は一大響

鳴を起し、大學其他の學校に於ける精神教育は、一大改革を見るに至れり。而して一方に於て普魯西の兵力は、一八四八年の獨逸統一事業を始め、一八七〇年の非埃主義なる諸邦の聯盟事業に多大の後援を與へ、隨つて、武力上に於ける其の勢力を扶植し得たり。恰も好し、是時に方り、前述の如き、旺盛なる全國の工業活動は、油然として勃興し來りしなり。是に於てか、建國の精神に燃ゆる全國民は、盡忠報國主義の精神的一團となつて、爰に物質上よりも、更に新たなる精神的創始力を得來りしなり。斯くて、此の工業發達の結果として、企業家及び勞働者の階級に新たなる政治的團體の發生を促すに至れり。此の新團體は、舊來の權勢階級と、當然軋轢を來たすべきものなるに拘はらず、獨逸の高等教育は、巧みに國民精神統一の實を擧げ得て、幸に其の危險を通過し、以て今日に及べるなり。斯くて、全國一致の實が、此の精神方面と軍力方面

と、經濟方面との握手によりて、完成せられし事こそ、獨逸が一八七〇年以來二千四百萬人の人口激増に關して起れる經濟的危機を、切り抜けし所以たるなれ。

今次の戰亂に依りて、敵も味方も、痛切なる教訓を得たるもの、頗る少しとせず、而かも獨逸の軍事的組織と、行政的勢力の組織並に國民の内の生活の統一、及び經濟的諸勢力の組織的訓練等は、何人と雖も之を是認せざる可らざる所に屬す。隨つて、今後獨逸と競争せんとする諸邦は、此の點に於て獨逸を模倣し、精神的統一を基礎として、軍隊的統制を産業上に實行し、精神と經濟との兩方面より鞏固なる國家を實現せんとするに至るべきや疑ひなし。現に獨逸を「目の敵」の如く思へる英國すら、開戰以來、自國の經濟的及び政治的の諸勢力が甚しく不整理なりしに氣付き、幾多の改革意見の發表を見るに至れり。即ち知る、獨逸が

世界の人道を無視せる殺伐なる軍國主義は、今後周圍の壓迫によりて、放棄するの已むなきに至る事あらんも、不安なる國境に對し、準備すべき丈の兵力は、必ず。充實せずんば止まず、之と同時に益々精神的統一を鞏固ならしめ、經濟生活上、着々他國を凌駕するの域に進まんこと必定なると共に、之れと競争する諸列強も、亦た獨逸が優勝の地歩を占め來れる、諸要素を研究採用し、以て世界の生存競争場裡に、輸贏を決すべきや亦た疑ひなし。斯くて、整理されたる組織ある國民生活を以て、列國が互に競争する事となるに於ては、我國の如く、各方面に於ける國民生活の甚しく不統一なる國家は、果して諸列強の競争圏内に入り得べきや否や。憂ふべきは眞に此の事にあり。

寛容なる大國主義

次に、今次の戰爭に依りて、各國民の得たりし教訓は「大國主義」の教訓

なり。英國が今日まで、其の膨脹を續け得しは、殖民地開放主義と、自由貿易主義とに依り、大國主義を採りしが爲めのみ。北米合衆國が嘗て英國に對して獨立せしは、英本國が之に對して、苛斂誅求を加へしに因るなり。之れに懲りし英國は、其後此の如き變則的結果を、再びせざらんことを欲し、從來の抑壓主義、殖民地支配主義を改めて、十九世紀以後は「自治的領土」(Self-governing dominions)の觀念を以て「植民帝國(Colonial Empire)の觀念に代ふるに至り、植民地に對する統治主義、直轄主義、抑壓主義、專制主義は、間接統治主義、自治主義となり、今次の戦争に於ても、印度及び濠洲等の植民地より、進んで母國の爲めに戦線に立つ者を生じ、植民地の忠義心の事實の上に表現せられしは、一に英國の自由主義の賢明なりしを證するものにして、同時に世界の趨勢は、既に武力主義に不利にして、寛容主義、大國主義に利なるを證するものなり。素より英

國に於ても領土の起源が、征服に依りて生ぜしものあり、單なる植民に依りて生ぜしものあり、又た植民的事實と征服的事實とを兼ねしものあり。第一の例は、印度及び埃及の如く、第二の例は、濠洲及びニュージーランドの如く、第三の例は、加奈陀及び南阿の如し。然れども、今後の植民政策は、武力主義、征服主義、侵掠主義を以て、行はるべきものに非らず、此の點に氣付きし英國は、目下母國の政局に、植民地の代表者を入るゝ事につき研究しつゝあり。今後此の問題が、如何に解決すべきかは、此所に論すべき限りにあらずと雖も、要するに、植民地が今後次第に開明の域に趣くに従つて、其の民政的基礎の上に立ち、母國との有機的關係を確立するに至らんは、必定なり。

英國植民政策の成功が世界の驚異する所となりしは、植民地の民政的傾向と、世界の大國主義とに能く順應せしが爲めなり。而して新興

の獨逸がこの點に於て成功せざりしは、時代後れの征服主義、侵掠主義、軍國主義を以て、舊式なる帝國殖民地の獲得を行はんとせしが爲めなり。即ちベルンハルダーの所謂「現時の地球上の區分に於て……正當なる地位を、吾人の國民に享受せしめんと欲せば、吾人は唯だ吾人の劍に頼るのみなり」の主義に基づき、武力に依る獨逸一流の、帝國主義を實施し、汎日耳曼主義を徹底せしめんとせしに依るなり。惟ふに獨逸は帝國建設の當時に於ては、僅かに四千萬の人口を有するに過ぎざりしに千九百十四年に至りては、七千萬の人口を有するに及べり。此驚くべき人口の増殖は、獨逸をして帝國主義を採るの己むなきに至れるものありしならんも、而かも之を達するの手段を選ばず、民族的發展と、經濟的侵略とに依る殖民地獲得の方法を講せず、一に武力に依りて政治的領土及び經濟的版圖を他の弱國より掠奪するの手段に出でたるは

其の帝國主義の發現上、一大頓挫を來たせし最大原因たらずんばあらず。

現 戰 争 と 大 國 主 義

然れども、此の獨逸すら、將來其の大國主義を殖民地經營の上にも、擴充するに至らんとする傾向あり。「中歐論」(Mitteleuropa)の著者ナウマンは獨逸一國にては、小なるに過ぐることを、今次の戦争の示す所なりと論じ、「大規模經營の精神、超國家的組織の精神は、今や政治を司配せり。小國は孤立を欲するとも、交通上、軍事上の變革に依り、大國間の關係の大なる影響を蒙むるものなり。現今の國際聯合及び大國的時代に於ては、獨逸何れも單獨とせば、過小にして、現今の如き大戰に堪へず、之れ中歐國體の必要なる所以なり」として「中歐同盟」の必要を説きたり。獨逸殖民大臣ウリアム、ゾルフ博士は、戦後に於ける獨逸の殖民政策(一、九

一五年半)を論じたる中に「殖民は即ち宣教である——此等の主義は社會民主々義者の爲に、甚しく攻撃せられつゝある支配者階級の立脚地とは、毫も共通の所がない、況んや土民を甘やかす、軟弱なる政策なりと云はるゝが如き、性質を有するものでもない、此の主義に依つてのみ、殖民制度の主要なる問題は之を解決することを得べく、土民の勞働を價值あるものたらしめ、低級人民の粗野にして、形を整へざる精力を、我が高等なる智力の廣き活動の領域内に持ち來らしむることが、可能なのである(文部省時局資料)」と説けり。此等の議論、及び獨逸今後の豫測に徴するも、將來の新國際社會に於ては、獨逸も亦た大國主義の徹底に全力を傾注することゝなるべきや明らかなり。將來の國際社會が大國主義によりて統一せらるゝの秋に當り、我が日本のみ「領土限局論」を固守し、若くは獨逸が國家生存上己を得ず採りし、全獨逸主義を模倣

して、獨逸の覆轍を履むが如きは、共に日本の國是に反す。領土限局論は、退嬰主義にして時勢に反し、獨逸模倣は、其の失策を自から再びする所以なり。而して又た佛國に模倣して殖民地擴張政策と、歐洲征服政策との間に、其の力を割きたるが爲め、遂に其の新世界を失ひし失敗を再びすべきにあらず。殊に今次戰亂平ぐの後には、必ずや未曾有の大規模なる歐洲同盟の出現あるべく、(アレン著「歐洲改造論」參考)隨つて日本は期せずして、東洋同盟の盟主たるべき地位に推さるゝに至るべし。此時に當り、日本をして國の内外より蒙むる緊張と、壓迫とに耐えしめんが爲めには、今よりして、徐々に其の輿論をして、世界の趨勢に順應せしめ置かざる可らず。故に此際に於て、政黨的反目の爲めに國家の大方針に悪影響を及ぼす如きは、假令少許たりとも、之を黙過すべきにあらず。宜しく國論を統一して、世界の大潮流に棹さし、帝國の悠久

なる運命を開拓せざる可らざる也。

日本四隣の壓迫と大國主義

十九世紀の初期に於て、那翁の帝國主義が歐洲の天地を振撼しつゝありしに當り、獨逸の大哲フイフターは、伯林大學の講壇より、四面の砲聲を聞きつゝ、『獨逸國民に告ぐ』と題する古今の大演説を試み、『思索者、理想主義者の産地たる獨逸は、物質的野心に、囚はるゝ事あり得可からず。獨逸の耕地と其産業とは、文明國民の生活資料を、提供するに十分なり。故に獨逸は、他國と海上に覇を争はんも、亦無益の業のみ』と云ひ、帝國主義無用論を絶叫せり。之を今日の獨逸の世界政策と比せんか、寔に豹變の甚しきに驚かざるを得ず。然りと雖も、此の今昔の相違は、獨逸爲政者一時の氣紛れによるものに非らず、内外の形勢實に其の主因を爲せるものなり。フイフターの獅子吼は、今日に於てこそ

時代後れなれ、當時にありては、獨逸の國家的基礎の築造上、先づ國民をして、眼を内に向はしむる必要ありしなり。實に獨逸の國是は、一世紀ならずして、一大變化を爲したるなり。即ち彈力ある獨逸の國民は、一世紀足らずの間に於て、内部に精力を蓄積し得て、雞蛋卵殻を破るの勢を以て外部に伸展し始めしなり。今次の大戦に依りて暴露せし、獨逸の違算は左ることながら、國民の伸展力に餘儀なくせられし、大國主義の採用は蓋し獨逸の已を得ざる所なるべし。而して獨逸は、今後猶ほ獨逸聯合の大國主義を採つて他人種に對する非人道を敢てしてまで、其の民族本位主義を強行するなるべく、此の二國に土勃兩國の加盟せる現在の四國同盟は、或は將來北海より小亞細亞に至る、世界の一大國を現出するの因子ともなる事あるべし。翻つて我が日本の現状を見よ、領土は擴張せられ、人口は獨逸を凌ぐの増加率を示し、經濟的餘力は

開國以來の記録を破り、商工業發展の機運は、未曾有の盛觀を呈しつゝあり、自づから東洋南洋を包括し、黄人種の爲に其の盟主とならんとする傾向あり。蓋し亦た天の日本に下せる大命ならんのみ。是時に當り、東に北米を控へ西に支那を扼す、各種の懸案は未だ解決せられずして今後更に幾多の紛糾曲折を見むとす。北に我が民族發展を待つ滿蒙あり、南に新領諸島あり、西南に我と靈犀一點相通する比島及び印度あり、日本は何れの方面を見渡すも、此際退嬰保守を許るべきにあらず、四隣の壓迫は、日本を驅つて、其大國主義を實現せしめざんば、止まざらんとなす。斯くて西歐同盟の他日歐洲に起らん日、我日本は、自から東洋の盟主となつて從來未だ開拓されざる、東洋の天然的寶庫を利用し、未だ曾て試みられざる大規模の經營を各方面に向て實施せんとする運命に際會せんとす。斯くの如き時勢の壓迫は、現に日本に向つて刻

々迫まり來りつゝあり。今や日本は政權爭奪と云ふが如き、蝸牛角上の争を事とすべきの秋にあらず。機會は千載にして一遇なり。國民焉んぞ然かく長夜の眠に耽ることを得む。怒濤澎湃我が島根に襲來す、正に是れ蒙古北來の秋に比すべきにあらずや。大正安國の論ある所以なり。

大 正 安 國 論 終

376
78

發行所

東京市丸の内區

辨海社

不
指

著
者

辨
海
社

大正十一年一月一日

大正十一年一月一日

辨海社

7.11.29

32

376

78

終

